

# 日本における中国画題綜覧（八）

A Compendium of Chinese Painting Themes in Japan (8)

## き行（二）

### きょうい 姜維

姜維（202～264）、字は伯約といい、天水冀（甘肅省甘谷東）の人である。幼い頃父親を亡くし、母親と一緒に住む。後漢の鄭玄（127～200）の学問が好きである。郡の計掾という官吏を務めた後、父親が郡のために戦死したので、維に中郎に賜った。郡の軍事に携わる。蜀の後主の建興六年（228）、諸葛孔明が軍を率い、祁山に向かった。ちょうど天水の太守が巡回したところで、維及び功曹梁緒、主簿尹賞、主記梁虔などが太守について行った。太守は蜀の軍隊がもうすぐ来ることと、さらに諸県が皆反旗を翻したのを聞き、同行の維などの官吏も異心があるのを疑い、その夜上邽に逃げた。維などの官吏は気づいた時、太守がもう去った後のことである。維などの官吏は追いかけたが、太守は城門を開けてくれないので、仕方なく、冀に戻った。今度は冀の城門も開けてくれない。そこで維などの官吏は共に諸葛孔明に詣でた。ちょうどその時馬謖が失敗し、諸葛孔明が西の県の千戸余り

の民家を遷したとことである。故に、維が故郷に戻った際、母親も行方不明となった。後に諸葛孔明は維を倉曹掾、奉義將軍に任命した。さらに當陽亭侯に任ぜられた。

#### 【出典】

姜維、字伯約、天水冀人也。少孤，與母居，好鄭氏學。仕郡上計掾，州郡爲從事。以父阿昔爲郡功曹，值羌戎叛亂，身爲郡將，沒於戰場。賜維官中郎，參本郡軍事。建興六年，丞相諸葛亮軍向祁山，時天水太守適出案行，維及功曹梁緒、主簿尹賞、主記梁虔等從行。太守聞蜀軍垂至，而諸縣響應，疑維等皆有異心，於是夜亡保上邽，維等覺太守去，追遲，至城門，城門已閉不納。維等相率還冀，冀亦不入維，維等乃俱詣諸葛亮。會馬謖敗於街亭，亮拔將西縣千餘家。及維等還故，維遂與母相失。亮辟維爲倉曹掾，加奉義將軍，封當陽亭侯。時年二十七。（晉・陳壽撰『三國志』蜀書卷四十四，蔣婉費禕姜維傳第十四）

#### 【作例】

「姜維」（百二十回本『繪圖三國演義』卷二、光緒十六年〔1890〕上海圖書集成局刊本）

「姜維」「笠翁筆」（法眼春卜一翁纂『畫史會要』卷二、寬延二年

[1749] 序、寛延四年 [1751] 刊本)

### きょうりょう 強良

強良は伝説の怪物で、虎の頭、人の体、四つの蹄、長い肘をしているという。

#### 【出典】

大荒之中有山、名曰北極天櫃、海水北注焉。「中略」又有神、銜蛇操蛇、其狀虎首人身、四蹄長肘、名曰彊良。(晉・郭璞撰『山海經』卷十七・大荒北經)

大荒山北極外有口銜蛇、其狀如虎首、人身、四蹄、長肘、名強良。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷)

#### 【作例】

「彊良」(馬昌儀著『古本山海經圖說』下卷、明・蔣心鎬繪図本、明・胡文煥繪図本などの図像が所収される。)

「強良」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「強良」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷五、享保四年 [1719] 刊本)

### ぎよいだるま 御衣達磨

「御衣達磨」は達磨が袈裟を二祖慧可に伝えることである。

#### 【出典】

最後慧可禮拜、依位而立。祖曰、汝得吾髓。乃顧慧可而告之曰、昔如來以正法眼付迦葉大士、展轉囑累、而至於我。我今付汝、汝當護持。并授汝袈裟、以爲法信。各有所表、宜可知矣。可曰、請師指陳。祖曰、內傳法印、以契證心。外付袈裟、以定宗旨。後代澆薄、疑慮競生。云吾西天之人、言汝此方之子、憑何得法、何以證之、汝今受此法衣、卻後難生、但出此衣并吾法偈、用以表明其化無礙。至吾滅

後二百年、衣止不傳、法周沙界。明道者多、行道者少。說理者多、通理者少。潛符密證、千萬有餘。汝當闡揚、勿輕未悟。一念回機、便同本得。聽吾偈曰、吾本來茲土、傳法救迷情。一花開五葉、結果自然成。(宋・普濟撰『五燈會元』卷一、東土祖師)

#### 【作例】

「御衣達磨」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷六、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

「御衣達磨」(某岡之繪『繪圖の林』卷下、元禄二年 [1689] 刊本)

### きょういたんと 姜維膽斗

姜維が戦場で魏の兵士に殺された。彼の死体が解剖され、胆嚢が斗のような大きさだったという。

↓ 姜維

#### 【出典】

蜀志、姜維字伯約、天水冀人。與費禕共錄尚書事。加督中外軍事、遷大將軍、整勒戎馬出戰、屢爲魏將鄧艾所破。及後主降、維投戈放甲、詣鎮西將軍鍾會。會厚待之、出則同輦、坐則同席。謂長史杜預曰、以伯約比中土名士、公休太初不能勝也。會既構鄧艾。因謂維等曰、詣成都、自稱益州牧。欲授維兵五萬人、使爲前驅。魏將士奮發、殺會及維。(世語曰、維死時見剖膽。如斗大。(唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷上)

#### 【作例】

「姜維膽斗」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷二、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

### きょうかすいげつ 鏡花水月

「鏡花水月」は、鏡の中の花、水中の月であり、いずれも虚像である。

見ることができ、求めることができない。いわば一種の「境地」である。禪宗では常に修行の最高境地をたとえる言葉として使う。後に巖羽の『滄浪詩話』で詩論の言葉として使うようになった。

## 【出典】

盛唐諸人惟在興趣，羚羊掛角，無跡可求。故其妙處透徹玲瓏，不可湊泊，如空中之音，相中之色，水中之月，鏡中之象，言有盡而意無窮。（宋・巖羽撰『滄浪詩話』詩辨）

福州安國院祥禪師，上堂，良久失聲曰，大是無端。雖然如此，事不得已。於中若有未搆者，更開方便，還會麼。時有僧問，不涉方便，乞師垂慈。師曰，汝問我答，即是方便。問，應物現形如水中月，如何是月。師提起拂子。僧曰，古人為甚麼道水月無形。師曰，見甚麼。（宋・普濟撰『五燈會元』卷八，安國瑠禪師法嗣）

## ぎょうかななめさす 瓊花斜挿

↓「四皓」

## 【作例】

「瓊花斜挿」「四皓」（『點石齋叢畫』、光緒十一年〔1885〕刊本、上海點石齋石印本）

「瓊花斜挿」「四皓」（老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』中卷、享和三年〔1803〕序、文化六年〔1809〕叙刊本）

## ぎょうき 龔綺

龔綺は南宋の殿中侍御史である。高宗（1127～1163在位）に仕えて南へ避難した際、崑山県の貞義（鎮義）村の南に滞在したことがある。龔綺はそこに銀杏の枝を土に挿して活かした。地元の人々が大変驚き、村の名前を「遇仙村」に変えたという。

## 【出典】

汴人龔綺仕至殿中侍御史，居於是村之南，因插銀杏枝活，時人異之，目為遇仙云。（宋・龔明之撰『中吳紀聞』卷四）

挿枝。汴人龔綺以殿中侍御史扈高宗南渡，道經崑山貞義里。所銀杏一株插地祝曰，若此枝得活，吾於是居，其枝長茂，遂成大樹。如瘦如乳者，凡七十餘順，相傳為其子孫嗣世之數。崑山志（明・陳耀文撰『天中記』卷五十二）

## 【作例】

「龔綺」（橋有税『繪本故事談』卷六、正徳四年〔1714〕刊本）

## ぎょうきょうび 驚恐寐

↓「董賢」

## ぎょうくんそ 堯君素

堯君素（？～618）は魏郡湯陰（河南省湯陰西）の人である。隋の煬帝は堯君素が藩邸の旧臣のため、鷹擊郎將に任用した。後に河東を死守し、唐の軍隊がなかなか落せなかった。最後に食糧が底に尽きて、部下に殺害された。

## 【出典】

堯君素，魏郡湯陰人也。煬帝為晉王時，君素以左右從。及嗣位，累遷鷹擊郎將。大業之末，盜賊蜂起，人多流亡，君素所部獨全。後從驍衛大將軍屈突通拒義兵於河東。俄而通引兵南遁，以君素有膽略，署領河東通守。「略」時百姓苦隋日久，及逢義舉，人有息肩之望。然君素善於統領，下不能叛。歲餘，頗得外生口，城中微知江都傾覆。又糧食乏絕，人不聊生，男女相食，衆心離駭。白虹降於府門，兵器之端，夜皆光見。月餘，君素為左右所害。（唐・魏徵撰『隋書』卷七十一，列傳第三十六）

【作例】

「堯君素射李氏妻」(明・熊大木撰『新刊徐文長先生評唐傳演義』巻二、萬曆四七年 [1619] 藏珠館刊本)  
 「堯君素」(大岡春卜『和漢故事卜翁新畫』巻五、寛延四年 [寶曆一、1751] 序、寶曆三年 [1753] 刊本)

きょうげんげきちく 香巖撃竹

「香巖撃竹」はまた「香巖撃竹大悟」といい、禪宗の公案の一つである。

【出典】

鄧州香巖智閑禪師、青州人也。厭俗辭親、觀方慕道。在百丈時性識聰敏、參禪不得。泊丈遷化、遂參瀉山。山問、我聞汝在百丈先師處、問一答十、問十答百。此是汝聰明靈利、意解識想、生死根本。父母未生時、試道一句看。師被一問、直得茫然。歸寮將平日看過底文字從頭要尋一句酬對、竟不能得、乃自歎曰、畫餅不可充饑。師遂將平昔所看文字燒卻。曰、此生不學佛法也、且作箇長行粥飯僧、免役心神。乃泣辭瀉山、直過南陽觀忠國師跡、遂憩止焉。一日、芟除草木、偶拋瓦礫、擊竹作聲、忽然省悟。遂歸沐浴焚香、遙禮瀉山。(宋・普濟撰『五燈會元』第九、瀉山祐禪師法嗣)

【作例】

↓「撃竹悟道」、「撃竹恒然」

きょうげんげじゅじょう 香巖樹上

↓「香巖上樹」

【作例】

「香巖樹上」(某岡之繪『繪圖の林』巻下、元禄二年 [1689] 刊本)  
 「香巖樹上」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』巻五、文政一年

[1818] 刊本)

きょうげんげじゅじょうもんどう 香巖樹上問答

↓「香巖上樹」

【作例】

「香巖樹上問答」(文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本)

きょうげんげじょうじゅ 香巖上樹

香巖とは香巖智行のことであり、臨濟宗の祖である。「香巖上樹」は禪宗の公案の一つである。

【出典】

上堂、若論此事、如上上樹、口銜樹枝、脚不踏枝、手不攀枝。樹下有人問、如何是祖師西來意。不對他、又違他所問。若對他、又喪身失命。當恁麼時、作麼生既得。時有虎頭招上座出衆云、樹上不問、未上樹時請和尚道。師乃呵呵大笑。(宋・普濟撰『五燈會元』巻九、瀉山祐禪師法嗣)

【作例】

↓「香巖樹上」

きょうこう 匡衡

匡衡、字は稚圭といい、東海承(山東省棗莊)の人である。若い頃、匡衡は一所懸命に勉強し、『詩』に精通した。伝えることによると、匡衡が勉強した際、照明がないので、隣の壁に穴を開け隣家の光を借りて読書したそうである。邑に文不識という金持ちがいる。家には蔵書が多い。匡衡が自ら農作業の手伝いに行つて、報酬がいらぬ。主

人が不思議に思い、そのわけを尋ねると、匡衡は「主人さまの本を全部読みたい。」と願った。主人が感心し、本をあげた。つい大学者になったという。漢の元帝の建昭三年（前36）、匡衡が丞相を拜命し、楽安侯に封ぜられたが、成帝の頃、罪で庶人に貶められ、家で亡くなった。

## 【出典】

匡衡、字稚圭、東海承人也。父世農夫，至衡好學，家貧，傭作以供資用，尤精力過絕人。諸儒爲之語曰，無說詩，匡鼎來；匡說詩，解人頤。衡射策甲科，以不應令除爲太常掌故，調補平原文學。學者多上書薦衡經明，當世少雙，令爲文學就官京師；後進皆欲從衡平原。衡不宜在遠方。事下太子太傅蕭望之，少府梁丘賀問，衡對詩諸大義，其對深美。望之奏衡經學精習，說有師道，可觀覽。宣帝不甚用儒，遣衡歸官。而皇太子見衡對，私善之。「中略」建昭三年，代韋玄成爲丞相，封樂安侯，食邑六百戶。「中略」郡即復以四百頃付樂安國。衡遣從史之僮，收取所還田租穀千餘石入衡家。司隸校尉駿、少府忠行廷尉事劾奏，衡監臨盜所主守直千金以上。「春秋之義，諸侯不得專地，所以壹統尊法制也。衡位三公，輔國政，領計簿，知郡實，正國界，計簿已定而背法制，專地盜土以自益，及賜，明阿承衡意，猥舉郡計，亂減縣界，附下罔上，擅以地附益大臣，皆不道。於是上可其奏，勿治，丞相免爲庶人，終於家。（漢・班固撰『漢書』卷八十一，匡張孔馬傳第五十一）

## 【作例】

「匡衡」（明・陳洪綬『博古葉子』、順治九年 [1652] 刊本）  
「匡衡」（橋有税『繪本故事談』卷二、正徳四年 [1714] 刊本）

きょうこうこうかんざしをはずしてせんおうをいさめる  
姜皇后脱簪諫宣王

「姜皇后脱簪諫宣王」はまた「周宣姜后」ともいう。姜后は周宣王の皇后である。周宣王はいつも夜寝ずに朝起きない。そのため、姜后は簪を脱ぎ、周宣王を諫めた。周宣王は自分の誤りを認め、朝から晩まで自ら政事を務め、遂に中興の名君となった。

## 【出典】

周宣姜后者，齊侯之女也。賢而有德。事非禮不言，行非禮不動。宣王常早臥晏起，后夫人不出房，姜后脱簪珥，待罪於永巷，使其傅母，通言於王曰，妾之不才，妾之淫心，見矣，致使君王失禮。而晏朝以見君王，樂色而忘德也。夫苟樂色，心必好奢，窮欲亂之所興也。原亂之興，從婢子起，敢請婢子之罪。王曰，寡人不德，實自有過，非夫人之罪也。遂復姜后而勤於政事，早朝晏退，卒成中興之名。（漢・劉向撰『古列女傳』卷二・周宣姜后）

## 【作例】

「姜皇后脱簪諫宣王」（橋有税『橋氏宗兵衛』『繪本寫寶袋』卷五、享保五年 [1720] 刊本）

きょうこうこうわくへき 匡衡鑿壁

匡衡は大変貧しい人で、夜勉強するのに、蠟燭を買う金とえない。そのため、隣の壁に穴をあけて、隣家の蠟燭の光を借りて勉強したという。→「匡衡」

## 【出典】

匡衡字稚圭。勤學而無燭，鄰舍有燭而不逮。衡乃穿壁引其光。以書暎（映）光而讀之。邑人大姓文不識。家富多書。乃與其傭作。而不



求償。主人怪問衡。衡曰、願得主人書遍讀之。主人感歎。資給以書。遂成大學。衡能說詩、時人爲之語曰、無說詩、匡鼎來。匡說詩。解人蹟。鼎、衡小名也。時人畏服之如是。聞者皆解頤歡笑。衡邑人有言詩者、衡從之、與語質疑、邑人挫服、倒屣而去。衡追之曰、先生留聽。更理前論。邑人曰、窮矣。遂去不反。(晉・葛洪撰『西京雜記』卷二)

【作例】

「鑿壁引光」(元・虞韶編『新刊大字分類校正日記故事大全』卷一、嘉靖二十一年 [1542] 序刊本)

「匡衡鑿壁」(『圖像合璧君臣故事句解』寛文二十二年 [1672] 跋、延寶二年 [1674] 和刻本)

「匡衡鑿壁」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷一、享和元年 [801] 序刊本、河内屋等發行)

きょうこうさんざん 京口三山

京口(江蘇省鎮江)の三山とは、北固山、金山及び焦山である。

【出典】

北固山在京口城北、下臨長江。元和郡縣志謂其勢險固、故名。(中略)金山在揚子江心、其勝概為天下第一。(中略)經觀瀾亭循石級西下、歲久、石多斷裂、俯視江波如行天上、足甚危慄。巖曰、祖師中肖唐裴頭陀像即開山得金、山因以得名。焦山在府城東北九里、峙江中即古之浮玉。漢末河東焦隱士光隱此山、故名。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理七卷)

【作例】

「京口三山圖」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理七卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「京口三山圖」(『名山圖』、崇禎六年 [1633] 墨繪齋刻本)

「京口三山」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷二、享保四年 [1719] 刊本)

きょうこうしなみをかけりしゆくゆうをいらず 共工氏波を駆けり祝融を射る圖

共工が祝融を射る出典は不詳である。

【作例】

「共工氏波を駆けり祝融を射る圖」(橘有税「橘氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷四、享保五年 [1720] 刊本)

きょうざんあいかきのなはし 仰山紅柿話

「仰山紅柿話」は禅宗の公案の一つである。仰山禪師が瀉山禪師と山を遊歴して、大きな石に座ることにした。仰山は瀉山のそばに仕えて立つ。突然鴉が一個の赤い柿を二人の前に落とした。瀉山がそれを拾って仰山に与え、仰山がそれを洗って瀉山に返した。瀉山が「君がどこから来たか」と聞いた。仰山が「あなたの道徳に感動されたからだ」と答えた。瀉山が「君も相應の分をもらわなければならぬ」と言い、仰山に半分を分けてあげた。

【出典】

師隨瀉山遊山、到盤陀石上坐。師侍立次、忽鴉御一紅柿落在面前。瀉拾與師、師接待洗了度與瀉。瀉曰、子甚處來。師曰、此是和尚道徳所感。瀉曰、汝也不得無分。即分半與師。(宋・普濟撰『五燈會元』卷九、瀉山祐禪師法嗣)

【作例】

「仰山紅柿話」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷五、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)

## ぎょうざんかくいちかく 仰山劃一劃

「仰山劃一劃」は禪宗の公案の一つである。仰山が座った途端、ある僧侶が礼拝に來た。仰山が相手にしない。その僧侶は仰山に「老師が字を知っているか」と聞いた。仰山は「随分」と答えた。そこで僧侶は右へひとまわりをして「何の字だろう」と。仰山は地面に十字を書いて応対した。僧侶はまた左へひとまわりをして「何の字だろう」と。仰山は十字を正に改めた。僧侶は○相を書いて両手を広げて修羅掌日月勢のようにある。「何の字だろう」と。仰山は㊦を書いて応対した。僧侶は婁至德勢を作った。仰山は「この通り、この通り。汝もこの通り。吾もこの通り。よく自分で修業してください」と。その僧侶は礼をして空に昇って行った。

## 【出典】

師坐次、有僧來作禮、師不顧。其僧乃問、師識字否。師曰、隨分。僧乃右旋一匝、曰、是甚麼字。師於地上書十字酬之。僧又左旋一匝、曰、是甚麼字。師改十字作卍字。僧畫此○相、以兩手拓、如脩羅掌日月勢。曰、是甚麼字。師乃畫此㊦相對之、僧乃作婁至德勢。師曰、如是、如是。此是諸佛之所護念、汝亦如是、吾亦如是。善自護持。其僧禮謝、騰空而去。（宋・普濟撰『五燈會元』卷九、馮山祐禪師法嗣）

## 【作例】

「仰山劃一劃」（法橋春卜畫『和漢名筆畫本手鑒畫本手』、享保五年 [1720] 序・跋刊本）  
 「仰山劃一劃」（橋宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷六、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本）

## ぎょうざんぐんおうほうし 行參軍王豊之

行參軍王豊之は蘭亭四十二人（一説は四十三人）の一人である。

## 【出典】

→「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

## 【作例】

「行參軍王豊之」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

## ぎょうざんぐんじきゅうぼう 行參軍事丘旄

行參軍事丘旄は蘭亭四十二人（一説は四十三人）の一人である。

## 【出典】

→「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

## 【作例】

「行參軍事丘旄」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

## ぎょうざんぐんようも 行參軍楊模

行參軍楊模は蘭亭四十二人（一説は四十三人）の一人である。

## 【出典】

→「蘭亭四十二賢圖」、「蘭亭四十三賢圖」

## 【作例】

「行參軍楊模」（文鳳山人「文鳳駿聲」『文鳳畫譜』三編、文化八年 [1811] 刊本）

## ぎょうざんぜんし 仰山禪師

袁州の仰山慧寂通智禪師は、韶州懐化の葉氏の子である。九歳に広

州和安寺に出家し、通禪師に師事した。十四歳に両親が取り戻して、結婚させたかったが、仰山禪師は従わず、指二本を切り、両親の前に跪いて許しを乞う。両親がそれを認め、再び通禪師のところに詣で、出家した。さっそく四方に出かけた。初めに耽源に会い、すでに禪の要旨を悟り、次に瀉山に会い、遂に禪の奥深いところを理解した。耽源は仰山に「国師は六代の祖師の圓像を伝えるはずである。全部で九十七個あり、私にそれを授かった。師は『私は死後三十年経つてから、南方から一人の沙彌が来て、この教を広げるはずだ。この順番で伝えて、絶たないように。』と言った。今、私はこれをあなたに渡すので、あなたはそれを持つべきだ。」といい、その本を仰山に手渡した。仰山はそれを受取り、一覽して焼却した。ある日、耽源は「前の諸相が描かれている本は大切にしてください。」と言った。仰山は「当時読んですぐ焼却した。」と答えた。耽源は「うちの法門にはできる人がいない。先師、諸祖師、諸大聖人だけがわかる。あなたはなぜ焼却したか。」と聞いた。仰山は「私は一覽し、すでにその意味が分かった。応用するのはいいが、持つのはいけない。」と。耽源は「そう言っても、後の人々は信用しないかもしれない。」と。仰山は「和尚はほしければ、もう一度作るのも難しいことではない。すぐにも一冊を作つて献上できる。まったく問題ない。」と。耽源は「よろしい。」と。耽源は大広間に上がり、仰山は諸僧侶の中から出て、○のポーズをして、手で拓して献上するポーズをした。それから両手を合わせて立つ。耽源は両手を交差して拳のポーズを示した。仰山は三步前に出て、女のようにお辞儀をした。耽源は頷き、仰山は礼をした。

## 【出典】

袁州仰山慧寂通智禪師、韶州懷化葉氏子。年九歳、於廣州和安寺投通禪師出家。十四歳、父母取歸、欲與婚媾。師不從、遂斷手指、跪致父母前、誓求正法、以答劬勞。父母乃許。再詣通處、而得

披剃。未登具、即遊方。初謁耽源、已悟玄旨。後參瀉山、遂升堂奥。耽源謂師曰、國師當時傳得六代祖師圓相、共九十七箇、授與老僧。乃曰、吾滅後三十年、南方有一沙彌到來、大興此教、次第傳受、無令斷絕。我今付汝、汝當奉持。遂將其本過與師。師接得一覽、便將火燒卻。耽源一日問、前來諸相、甚宜秘惜。師曰、當時看了便燒卻也。源曰、吾此法門無人能會、唯先師及諸祖師、諸大聖人方可委悉、子何得焚之。師曰、慧寂一覽、已知其意。但用得不可執本也。源曰、然雖如此於子即得、後人信之不及。師曰、和尚若要重錄不難、即重集一本呈上、更無遺失。源曰、然。耽源上堂、師出衆、作此○相以手拓呈了、卻叉手立。源以兩手相交、作拳示之。師進前三步、作女人拜。源點頭、師便禮拜。(宋・普濟撰『五燈會元』卷九、瀉山祐禪師法嗣)

## ぎょうざんはんげつわ 仰山半月話

「仰山半月話」は禪宗の公案の一つである。一人の梵僧が参拝に來た。すると、仰山禪師は地面に半月を書いた。梵僧は近づいて半月を円形にして足で消そうとした。仰山は両手を広げた。梵僧はむっとして出て行った。

## 【出典】

師因一梵僧來參、師於地上畫半月相。僧近前、添作圓相。似脚抹卻。師展兩手、僧拂袖便出。(明・語風圓信・郭凝之編『袁州仰山慧寂禪師語錄』「一卷」、《大正新脩大藏經》第四十七卷、諸宗部四)

## 【作例】

「仰山半月話」(橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷六、貞享四年 [1687] 刊本、文政一年 [1818] 再刊本)



## きょうし 姜詩

後漢の姜詩は広漢（四川省広漢）の人で、母親に大変親孝行である。妻龐氏は姜詩以上に母親の面倒を見た。母親は江水を飲むのが好きなので、妻は常に六七里離れた川に水を汲みに行く。ある日、風が激しく、帰りが遅くなり、母親は喉が渴いて飲む水がなかった。そのため、姜詩が妻を責め、三下り半を出した。妻は近所の家を留めてもらい、昼夜紡績をして、売った金で美味しいものを近所の姥にこづつて、母親に渡した。しばらくすると、母親が不審に思い、姥に聞いた。その姥は真実を告げた。母親は恥ずかしくなり、妻を呼び戻した。妻は前よりもっと親孝行をするようになった。姜詩夫婦の子供が遠くに水汲みに行つて、溺れて水死した。妻は母親が悲しくなるから、敢えて言わず、遊学に行つたという口実を作つた。母親は魚の膾炙が好きで、一人で食べきれない。夫婦はよく膾炙を作つて、隣家のお母さんと呼んできて一緒に食べる。そのうち、家のそばに突然泉が湧いてきて、水の味は江水のようで、毎朝二匹の鯉が躍り出て、二人のお母さんに膾炙の料理を供える。赤眉賊がそこを通つた際、驚いて、感心した。逆に米や肉を差し入れた。明帝の永平三（六〇）年、姜詩が推挙され、郎中になった。後に江陽令に昇進した。在任中亡くなった。地元の人々は彼を祀つた。

## 【出典】

廣漢 姜詩妻者、同郡龐盛之女也。詩事母至孝、妻奉順尤篤。母好飲江水、水去舍六七里、妻常泝流而汲。後值風、不時得還、母渴詩責而遣之。妻乃寄止鄰舍、晝夜紡績、市珍羞、使鄰母以意自遣其姑。如是者久之、姑怪問鄰母、鄰母具對。姑感慙呼還、恩養愈謹。其子後因遠汲溺死、妻恐姑哀傷、不敢言、而托以行學不在。姑嗜魚鱸、又不能獨食、夫婦常力作供鱸、呼鄰母共之。舍側忽有湧泉、味

如江水、每旦輒出雙鯉魚、常以供二母之膳。赤眉散賊經詩里、袍（弓字邊）兵而過、曰、驚大孝必觸鬼神。時歲荒、賊乃遺時米肉、受而埋之、比落蒙其安全。永平三年、察孝廉、顯宗詔曰、大孝入朝、凡諸舉者一聽平之。由是皆拜郎中。詩尋除江陽令、卒于官。所居治、鄉人爲立祀。（南朝宋・范曄撰『後漢書』卷八十四、列女傳第七十四）

## 【作例】

- 「湧水出魚」（『圖像合璧君臣故事句解』卷二、寛文十二年〔1672〕跋、延寶二年〔1674〕和刻本）  
 「湧泉躍鯉」（『新鍔類解官様日記故事大全』卷一、寛文九年〔1669〕和刻本）  
 「湧泉躍鯉」（『點石齋叢書』、光緒十一年〔1885〕刊本、上海点石齋石印本）  
 「姜詩休書逐妻」（明・陳熙裔「一説は顧順全」撰『新刻出像首注姜詩躍鯉記』、萬曆年間〔1573～1620〕刊本）  
 「姜詩妻」（清・上官周繪『晚笑堂畫傳』、乾隆八年〔1743〕刊本）  
 「姜詩」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕刊本）  
 「姜詩」（南里亭其樂輯、葛飾戴斗畫『二十四孝圖會』、文政五年〔1822〕河内屋等發兌）  
 「姜詩」（悟足齋固碩書『二十四孝繪抄』天保十三年〔1842〕、須原屋等發行）

## きょうしやぶしよう 行者武松

行者武松は『水滸伝』の豪傑の一人である。兄武大郎を殺害した兄嫁潘金蓮と西門慶を殺したため、流された。行者とは彼の綽名である。武松は張団練、張都監、蔣門神を殺した後、指名手配から逃れるために、行者（僧侶）の模様を扮装したため、名付けられたのである。後に梁山泊に入った。

## 【出典】

孫二娘去房中取出包袱來打開，將出許多衣裳，教武松裏外穿了。武松自看道卻一似與我身上做的。着了皂直裰，繫了縵，把蘊笠兒除下來，解開頭髮，摺疊起來，將界箍兒箍起，掛着數珠。張青、孫二娘看了，兩個喝采道，卻不是前生注定。武松討面鏡子照了，也自哈哈大笑起來。張清道，二哥爲何大笑。武松道，我照了自也好笑。我也做得箇行者。大哥便與我剪了頭髮。張清拿起剪刀，替武松把前後頭髮都剪了。〔中略〕孫二娘取出度牒，就與他縫箇錦袋盛了。教武松掛在貼肉胸前。武松拜謝了他夫妻兩個。〔中略〕武松辭了出門，插起雙袖，搖擺着便行。張青夫妻看了，喝采道，果然好箇行者。（百二十回本『水滸傳』第三十一回）

## 【作例】

〔行者武松〕（明・陳洪綬繪『水滸葉子』、天啓六年〔1626〕刊本）  
 〔行者武松〕（高井蘭山翁撰、葛飾前北爲一翁畫圖『繪本孝経』、天保五年〔1834〕序、嘉永二年〔1849〕刊本）  
 〔武松〕（葛飾爲齋繪『萬物圖解爲齋畫式』二帙、元治一年〔1864〕序刊本）  
 〔行者武松〕（仮名垣魯文標記、一雲齋国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1868〕不朽堂刻本）  
 〔行者武松〕（江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年〔1867〕序、大橋堂梓・藏板）

### ぎょうしゃぶしょう、けいようこうじょうとらをころす 行者武松、景陽崗に虎を殺す

武松は『水滸伝』の英雄人物の一人である。これは彼が景陽崗で虎を殺すストーリーを図解する絵である。

## 【作例】

〔行者武松、景陽崗に虎を殺す〕（葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓）  
 きょうしょうぶくつ 龔勝不屈  
 龔勝は字が君賓といい、楚の人である。漢哀帝（前7～1在位）の頃、勝は光祿大夫であったが、王莽の政權になると、官を辞め故郷に帰った。王莽が使者を遣つて勝を迎えたが、勝は王莽の任命を断り、飲食をやめ、十四日間後餓死した。

## 【出典】

前漢 龔勝字君賓、舍字君倩、楚人也。二人相友、並著名節。世謂楚兩龔。哀帝時、勝為光祿大夫、王莽秉政、乞骸骨。莽後遣使、即拜講學祭酒。稱疾不應。復遣使者、奉璽書太子師友祭酒印綬、安車駟馬、與郡太守、縣長吏、官屬諸生千人以上、入里致詔、勝稱病篤、東首加朝服拖紳、勝曰、吾受漢家厚恩、亡以報、今老且暮入地、詎豈以一身事二姓、下見故主哉。語畢不開口飲食、積十四日死。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷上）

## 【作例】

〔龔勝不屈〕（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷十、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

### きょうすいかんのう 龔遂勸農

龔遂は字が少卿といい、山陽南の平陽の人である。漢宣帝（前49～49在位）の頃、渤海の辺りは凶作のため飢饉が起きた。盗賊が横行する。故に宣帝が遂を渤海太守に任命した。遂が赴任した後、とりあえず、倉庫を開け飢饉の民を救済した。また人民に農業を奨励し、刀剣を所持する人に刀剣を売却させ、牛を購入させる。これは即ち有

名な「売刀買犢」の話である。

【出典】

前漢 龔遂字少卿、山陽南平陽人。以明經爲官。宣帝時渤海左右郡歲饑，盜賊並起。二千石不能禽制。上選能制者，以遂爲渤海太守。年七十餘。遂至界，移書勸屬縣，悉罷逐捕盜賊吏，諸持鉏鉤田器者皆爲良民，吏毋得問，持兵者乃爲盜賊。盜賊悉平，民安土樂業。遂乃開倉廩假貧民，選用良吏尉安牧養焉。遂見齊俗奢侈，好末技，不田作。乃躬率以儉約，勸民務農桑，民有帶刀劍者，使賣劍買牛，賣刀買犢。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷下）

【作例】

「龔遂勸農」（下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷六、享和元年〔2011〕序刊本、河内屋等發行）

きょうぞく 匡續

匡續は字が君平、号が匡阜といい、南楚の人である。生まれつきが聡明で、幼い頃から仙人を志した。周武王の頃、彼は老子に師事した。後に劉越という仙人に師事し、道を得たという。

【出典】

匡續、字君平、南楚人、號匡阜先生。生而神靈、兒時便有物外志。周武王時、師老聃。得長生之道。結茅南障山虎溪之上、隱焉。室中無所有、惟置一榻、簡書數篇而已。武王屢徵不起。一日、有少年詣之、自通曰、姓劉、名越、家在前山之左。邀先生過之、且曰、至山下有石高二丈許、即予家也。續後如約而往、至山下、四顧無人家、惟有一石、乃叩之。石爲之開、若雙扉然。有二青衣執絳節前導、入其中。瓊樓玉宇、見前少年、傳以仙訣、由此得道、遂煉丹于其所。漢武帝元封元年、南巡狩、登祀天柱、嘗望秩焉。繼而射蛟溇陽江中、復封先生爲南極大明公、仍命立祠於虎溪舊隱、列於祀典。迨至東晉

厲門僧慧遠、遊羅浮、夜宿祠下、愛其溪山之勝、謁郡守桓伊曰、昨夢匡先生、願捨祠爲寺、伊從之。而遷先生祠於山口。唐開元間、再加興建、尊爲仙廟。凡水旱癘疫、禱之皆應。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷一）

【作例】

「匡續」（明・王世貞『有象列仙全傳』卷一、萬曆二八年〔1600〕刊本）  
「匡續」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』一、天明四年〔1784〕刊本）

きょうだん 杏壇

伝える話によると、杏壇とは孔子が弟子たちに教えるところであった。講壇の周りに杏の木が植えられているため、「杏壇」と呼ばれるようになったという。

【出典】

孔子遊乎緇帷之林。休坐乎杏壇之上。弟子讀書、孔子弦歌鼓琴。（『莊子』卷十、漁父第三十一）  
先聖殿前有壇一所、即先聖教授之遺址也。漢鍾離意爲魯相、出私錢三萬修夫子車身、入廟拭几席劍履、遣男子張伯除堂下草、土中得玉璧七枚、伯懷其一、以六枚白意。意安置几前堂下床首有懸甕、背有丹書、乃夫子遺甕、人莫敢發。意發之得素書曰、後世修吾世修吾書董仲舒、護吾車拭吾履發吾笥會稽鍾離意、璧有七、張伯懷其一。意即召問、伯服焉。乾興間修殿、以甕壁爲壇、環植以杏、因名曰杏壇。（宋・陳元靚撰『事林廣記』卷三）  
杏壇在魯城內、靈光殿爲漢景帝程姬之子恭王餘所立。王延壽賦序、因魯僖基兆而管也。遭漢中微、盜賊奔突、自西京未央、章建之殿、皆見墮壞、而靈光巋然獨存。今其遺址不復可見。（宋・莊綽撰『雞

助編』巻中)

【作例】

「孔子登杏壇撫琴圖」(宋・孔傳撰『東家雜記』、宋刊本、南宋中葉補版)

「杏壇設教三千」(『孔門儒教列傳』巻一、明刊本)

「無題」(「孔子杏壇圖、倣廷策筆」(『芥子園畫傳』第四集・人物、嘉慶二三年 [1818] 初刊本、光緒二十二年 [1895] 石印本)

きょうだんこうし 杏壇孔子

↓「杏壇」

きょうど 匈奴

匈奴は祖先が夏后氏の末裔で、淳維じゅんいという。唐・虞以前には山戎さんじゆう、獫狁けんたん、薰粥くんじくという。彼らは北の地に住み、草と水の地を転々と遊牧の生活を送る騎馬民族である。

【出典】

匈奴、其先夏后氏之苗裔、曰淳維。唐虞以上有山戎、獫狁、薰粥、居於北邊、隨草牧畜而轉移。其畜之所、多則馬、牛、羊、其奇畜則橐佻、驢、羸(中間非羊、是馬字)、駃騠、駒騶、驪奚。逐水草遷徙、無城郭、常居耕山之業、然亦各有分地。無文書、以言語爲約束。兒能騎羊、引弓射鳥鼠、少長則射狐菟、肉食。士力能彎弓、盡爲甲騎。其俗、寬則隨畜田獵禽獸爲生業、急則人習戰攻以侵伐、其天性也。其長兵則弓矢、短兵則刀鋌。利則進、不利則退、不羞遁走。苟利所在、不知禮儀。自君王以下咸食畜肉、衣其皮革、披旃裘。壯者食肥美、老者飲食其餘。貴壯健、賤老弱。父死、妻其後母。兄死、皆取其妻妻之。妻俗有名不諱而無字。(漢・班固撰『漢書』巻九十四上、匈奴列傳第六十四上)

【作例】

「匈奴」(明・王圻、王思義『三才圖繪』人物十三卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「匈奴」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年 [1719] 刊本)

ぎょうふうゆるるごりようを 曉風揺五両

唐の權徳輿の「曉」という五言絶句の詩句を図解する絵である。

【出典】

曉風揺五両、殘月映石壁。稍稍曙光開、片帆在空碧。(權徳輿「曉」、清・彭定求等編『全唐詩』巻三百二十五)

【作例】

「曉風揺五両」(『百人一詩畫譜』、安永三年 [1774] 原刻、寛政六年 [1794] 再刻本)

きょうぼくこく 繳濮國

繳濮國は永昌郡(雲南省)の南から千五百里離れるところである。その國人は尻尾をしていて、座る際、まず地面に穴を掘って尻尾を入れておく。もし誤って尻尾を折ると、すぐ死亡するという。

【出典】

繳濮國、在永昌郡南千五百里、國人有尾、坐則先穿地作穴、以安其尾、如誤折其尾、卒然而死。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十四卷)

【作例】

「繳濮國」(明・王圻、王思義『三才圖會』人物十四卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「繳濮國」(橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』巻五、享保四年 [1719] 刊本)



## きょうめいし 龔明之

龔明之、字は希（熙）仲といい、号は五休居士という。明之は崑山（江蘇省崑山）の人である。宋の紹興（1131-1162）年間、科擧の試験で高州文学という官職を与えられ、淳熙（1174-1189）の初め頃、宣教郎に任用された。著書に『中呉紀聞』がある。

## 【出典】

明之、字希仲、號五休居士、崑山人。紹興間、以鄉貢廷試、授高州文學。淳熙初、舉經明行修、授宣教郎致仕。（清・永瑤等《欽定四庫全書總目》卷七十七）

龔明之、字熙仲、崑山人。幼孤、鞠於祖母李氏。李嘗語之曰、吾年三十歲時、得寒疾、困臥三日、夢綠袍判官告曰、與汝七十七。豈吾壽數至此邪。崇寧中、李行年適滿所夢之數、遂病。病已革、龔愁窘不聊生、中夕、炷香於頂者七日、泣禱上帝、願減己壽五年以延李命。香未盡、聞腦中有爆裂聲、不爲動、哀懇益切。明日、李病尋癒、壽至八十三而終。龔游舉場蹭蹬、僅領鄉舉、晚以特恩殿試、策名前列。時已八十二歲、法不應任官。吳人在朝者列其行義、合詞薦之、得監南嶽廟。淳熙五年、丐致仕、鄉人自趙再思左史以下二十人、又爲請於朝、覬增秩。參知政事錢師魏謂其無例、以爲難。吳仁傑曰、公試與丞相敷陳、必能動上聽。錢問其故、仁傑曰、龔君頃以至行動上帝、是以知今日必能動人主。因言其故、錢悚然敬聽。果得旨、遷宣教、卽賜服緋。又四年乃卒。（宋・洪邁撰『夷堅志補』卷一）

## 【作例】

「龔明之」(大岡春卜「和漢故事卜翁新畫」卷一、寛延四年「寶曆一、[751]序、寶曆三年 [1753]刊本)

## きょうろざん 匡廬山

↓「廬山」

## 【作例】

「匡廬山」(老蓮先生著『畫圖醉芙蓉』下卷、享和三年 [1803]序、文化六年 [1809]叙刊本)

## きよえん 遽瑗

↓「遽伯玉」

## 【作例】

「遽瑗」(橘宗兵衛「有税」繪『繪本通寶志』卷五上、享保一四年 [1729]刊本)

## ぎよからく 漁家樂

## 【作例】

「漁家樂」(文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年 [1803]刊本)  
「漁家樂」(文鳳駿聲『文鳳籠畫』、享和三年 [1803]刊本)

## ぎよきりんろしゆんぎ 玉麒麟盧俊儀(義)

盧俊儀は盧俊義のことであり、『水滸伝』の中の一人の豪傑である。綽名は「玉麒麟」という。後に梁山泊に入った。

## 【出典】

那大圓和尚說道、頭領如何不聞河北玉麒麟之名。宋江、吳用聽了、猛然省起、說道、你看我們未老、卻恁地忘事。北京城裏是有箇盧大員外、雙名俊義、綽號玉麒麟、是河北三絕。祖居北京人氏、一身好武藝、棍棒天下無對。梁山泊寨中若得此人時、何怕官軍緝捕、豈愁兵馬來臨。(百二十回本『水滸全傳』第六十回)



## 【作例】

「玉麒麟盧俊義」(明・陳洪綬繪「水滸葉子」、天啓六年 [1626] 頃の刊本)

「盧俊義」(清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年 [1835] 和刻本)

「玉麒麟盧俊義」(葛飾前北斎爲一筆「繪本水滸傳」、文政一二年 [1829] 序、萬極堂梓)

「玉麒麟盧俊義」(仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『繡像水滸銘々傳』前編下、弘化五年 [1828] 刊本)

## ぎよくさんか 玉簪花

玉簪花はまた「白萼」ともいう。骨を溶かすため、齒に着けてはならない。紫色と黄色との二色がある。

## 【出典】

玉簪花、一名白萼。能消骨鯁、不可著牙。著牙則裂碎、有紫黃二色。

紫者多、黃者佳、種不多有。(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二卷)

## 【作例】

「玉簪花」(明・王圻、王思義撰『三才圖會』草木十二卷、萬曆三十七年 [1609] 刊本)

「玉簪花」(溪斎義信筆『溪斎浮世畫譜』)

## ぎよくしつとをひく 玉扨弹琴

↓「太眞王夫人」

## 【作例】

「太眞王夫人」(『北斎美術館』5、麻布工芸美術館所蔵)

## ぎよくし 玉子

玉子、姓は張(一説は章)、名は震という。南郡(湖北省荊州)の人である。幼い頃、いろんな経典を学んだ。周の幽王が彼を起用したが、断つた。後に長桑子に師事し、いろんな秘術を覚えた。そのうち自分の理論を確立し、道教関係の書物を百篇あまり著した。その術を以て養生や治療ができ、災や禍を避けることができ、家屋や大木を吹き飛ばすことができ、雷雨や雲霧を作ることができ、草や瓦や石などを六畜や童虎に化けることができ、立つと、行列になり数百人の分身を作ることができ、歩いて川を渡ることができる。また口の中の水を噴き出すと、皆珠や玉になり、しかもそのまま変わらない。また気を閉じ込めて呼吸しないと、体を持ち上げることができず、推すことができず、曲げることができず、伸ばすことができない。そのままの状態が百数十日後再び起きて、昔の状態に戻る。弟子たちと一緒に出かける時に、それぞれに泥の塊で馬に化けて与える。目を閉じると、あつという間に大きい馬になる。それに乗って一日千里を走れる。鳥が通つて、指さすと、すぐ落ちる。川辺で符を投げると、魚や鼈が這い上がってくる。彼が方術を行う場合、水を器に入れ、吹きあげる。となると、水柱が数百丈に達し、水の上方に赤い光が、二丈ある。この水でいろんな病気が治せる。体の中の病気なら、水を飲めばいい。外の病気の場合、洗えば治る。後に崆峒山に入り、丹薬を作り、白日昇天を果たした。

## 【出典】

玉子者、姓張、「名」震、南郡人也。少學衆經、周幽王徵之不起。乃歎曰、人居世間、日失一日、去生轉遠、去死轉近。而貪富貴、不知養生。命盡氣絕、即死、位爲王侯、金玉如山、何益。於是爲灰土乎。獨有神仙度世、可以無窮耳。乃師長桑子、受其衆術、乃造一家

之法，著道書百餘篇。其術以務魁爲主，而精於五行之意，演其微妙，以養性治病，消災散禍。能起飄風，發木折屋，作雲雷雨霧。以草芥瓦石爲六畜龍虎，立便成行。分形爲數百千人。又能涉行江漢。含水噴之，立成珠玉，遂不復變也。或時閉氣不息，舉之不起，推之不動，屈之不曲，伸之不直，如此數十日乃復起如故。每與諸弟子行，各丸泥爲馬與之，皆令閉目，須臾皆乘大馬，乘之一日千里。又能吐五色氣，起數丈。見飛鳥過，指之墮地。又臨淵投符召魚鼈，魚鼈皆走上岸。又能使諸弟子舉眼即見千里外物，亦不能久也。其務魁，時以器盛水，著兩魁之間，吹而噓之，水上立有赤光，繞之曄曄而起。又以此水治百病，在內者飲之，在外者浴之，皆使立癒。後入崆峒山合丹，丹成，白日昇天也。（晉・葛洪撰『神仙傳』卷四）

## 【作例】

「玉子」（明・王世貞『有象列仙全傳』卷二、萬曆二八年〔1600〕刊本）

「玉子」（寂照主人月僊寫並題『列仙圖贊』二、天明四年〔1784〕刊本）

「玉子」（桃溪先生輯『名家畫譜』、文化九年〔1823〕序刊本）

「玉子」（『畫圖百珍』下、明治一七年〔1884〕刊本）

↓「玉子章」

## ぎょくししょう 玉子章

↓「玉子」

## 【作例】

「玉子章」（橘有税『繪本故事談』卷三、正徳四年〔1714〕刊本）

## ぎょくじよはなあらしひらき 玉漱花争發

唐の崔國輔の「採蓮曲」という五言絶句を図解する絵である。

## 【出典】

玉漱花争發，金塘水亂流。相逢長相失，並著採蓮舟。（崔國輔「採蓮曲」，清・彭定求等編『全唐詩』卷一百十九）

## 【作例】

「玉漱花争發」（『百人一詩畫譜』、安永三年〔1774〕原刻、寛政六年〔1794〕再刻本）

## きょくすい 曲水

↓「曲水宴」

## 【作例】

「曲水」（『北溪漫畫初編』）

## きょくすいのえん 曲水宴（曲水之宴）

三月三日、禊ぎを祓う風習がある。この風習はかなり早い時期にできた。『周禮』では三月上巳、巫女が禊ぎを祓うことを司る。禊は潔という意味である。故に水で清めるわけである。魏以後、上巳は段々使わなくなり、三月三日を使うようになった。

流觴の風習もかなり早い時期にできたようである。『齊諧記』などの記述では、晋の武帝がかつて尚書郎摯虞仲治に、「三月三日、曲水流觴は何の意味だろうか。」と尋ねた。摯虞は「漢の章帝の頃、平原徐肇が三月初めに三人の娘が生まれた。三日まで皆亡くなってしまった。村の人々は皆怖がつて、相次いで川辺に行つて沐浴して、觴をたたくさん流した。」と説明した。帝は「となると、よいことではないね。」と言った。そこで尚書郎束皙は「仲治小生、このことを知らないのだ。臣下に説明させてもらう。昔周公が洛邑を建てて、完成した際、川の流れに酒を流した。故に『羽觴随波流』という詩句がある。また、秦の昭王が三月上巳に酒を川の曲がるところに置いた。その時金人が川

から出てきた。水心剣を献上して『今主君の支配は西夏まで達するだろう。』と言った。後に秦が諸国の盟主になったため、曲水が定着するようになった。西漢と東漢がそれに続き、大変縁起のいいことである。』と言った。帝は「よろしい。」といい、東哲に金五十斤を賜り、仲治を城陽令に左遷した。

曲水流觴は、また曲水流杯ともいう。後に文人士大夫の風流となり、中でも有名なのは、やはり蘭亭の曲水の宴に数える。晋の王羲之等四十二人（一説は四十三人）が蘭亭で曲水の宴を開き、皆は詩を書き、王羲之は序文を書いた。この文人の風流は唐代では、帝が科挙に及第した進士および臣下を招宴する慣例ともなった。

### 【出典】

女巫掌歲時，祓除鬻浴。歲時祓除如今三月上巳，如水上之類。鬻浴謂以香薰草藥沐浴。「疏」注歲時之沐浴○釋曰，歲時祓除者，非謂歲之四時，惟謂歲之三月之時。（『十三經注疏』周禮卷二十六）

晉武帝問尚書郎摯虞仲治，三月三日，曲水，其義何旨。答曰，漢章帝時，平原徐肇以三月初生三女，至三日俱亡，一村以爲怪，乃相與至水濱盥洗，因流以盥觴。曲水之義，蓋自此矣。帝曰，若如所談，便非嘉事也。尚書郎束皙進曰，摯虞小生，不足以知此。臣請說其始。昔周公成洛邑，因流水泛酒。故逸詩云，羽觴隨波流。又秦昭王三月上巳，置酒河曲，見金人自河而出，奉水心劍曰，令君制有西夏。及秦霸諸侯，乃因此處立爲曲水。二漢相緣，皆爲盛事。帝曰，善。賜金五十斤。左遷仲治爲城陽令。（梁・吳均撰『續齊諧記』不分卷）

三月三日。四民並出江渚池沼間。爲流杯曲水之飲。按續齊諧記。晉武帝問尚書摯虞曰，三日曲水，其義何指。答曰，漢帝時，平原徐肇，以三月初生三女。而三日俱亡。一村以爲怪。乃相攜至水濱盥洗，遂因流水以盥觴，曲水起於此。帝曰，若此談便非嘉事。尚書郎束皙曰，摯虞小生，不足以知，臣請說其始。昔周公卜成洛邑，因流水以汎酒。

故逸詩云，羽觴隨波流。又秦昭王三月上巳，置酒河曲，見金人自東而出，奉水心劍，曰，令君治有西夏。及秦霸諸侯，乃因其處，立爲曲水。二漢相沿，皆爲盛事。帝曰，善。賜金十五斤。左遷摯虞爲陽城令。按韓詩云，唯溱與洧。方沅沅兮。唯士與女。方秉簡兮。注謂今三月桃花水下。以招魂續魄。祓除歲穢。周禮女巫。歲時祓除鬻浴。鄭注云。今三月上巳水上之類。司馬彪禮儀志。三月三日。官民並襍飲於東流樹上。彌驗此日。南嶽記云，其山西曲水壇，水從石上行。士女臨河壇。三月三日所逍遙處。周處吳徵注吳地記，則又引郭虞三女並以元巳日死，故臨水以消災，所未詳也。張景陽洛襍賦，則洛水之遊，傅長虞神全文，乃園池之宴。孔子云。暮春浴乎沂，則水濱襍祓，由來遠矣。（梁・宗懷撰『荆楚歲時記』不分卷）

三月三日上巳之辰，曲水流觴故事，起於晉時。唐朝賜宴曲江，傾都襍飲踏青，亦是此意。右軍王羲之蘭亭序云，暮江之春，脩禊事。杜甫麗人行云，三月三日天氣新，長安水邊多麗人，形容此景，至今令人愛慕。兼之此日正遇北極佑聖真君聖誕之日，佑聖觀侍奉香火，其觀系屬御前去處，內侍提舉觀中事務，當日降賜御香，脩崇醮錄。午時朝賀，排列威儀，奏天樂於墀下，羽流整肅，謹朝謁於陛前，吟詠洞張陳禮。士庶燒香，紛集殿庭。諸官道宇，俱設醮事，上祈國泰，下保民安。諸軍寨及殿司衙奉事香火者，皆安排社會，結傳臺閣，迎列於道，觀觀者紛紛。貴家士庶，亦設醮祈恩。貧者酌水獻花。杭城事聖之虔，他郡所無也。（宋・吳自牧撰『夢梁錄』卷二）

### 【作例】

「曲水の宴」（滝澤清畫『潜龍畫譜』人物之部、明治一五年〔1882〕刊本）

### きよくすいりゅうしょう 曲水流觴

↓「曲水宴」

## ぎよくせんざん 玉泉山

玉泉山は順天府（北京）の西北三十里のところにある。山の南側に崖があり、上に「玉泉」という二文字が刻まれている。

## 【出典】

玉泉山在府西北三十里、頂有金行宮芙蓉殿故址。相傳章宗嘗避暑於此。山畔有三石洞。一在山西南，其下水深莫測。一在山之陽，南又有石崖，崖上刻有玉泉二字。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理六卷）

## 【作例】

「玉泉山圖」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』地理六卷、萬曆三十七年〔1609〕刊行）

「玉泉山」（橋有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷二、享保四年〔1719〕刊行）

## ぎよくてい 玉廷

## 【作例】

「玉廷」（橋守国『繪本直指寶』卷五、延享二年〔1745〕刊本）

## ぎよくどうふき 玉堂富貴

「玉堂富貴」は「金玉滿堂」と同じである。玉蘭の花の絵のほかに、玉蘭に牡丹の絵もある。

↓「金玉滿堂」

## 【作例】

「玉堂富貴」（葉九如編『三希堂畫譜大観』草蟲花卉大観、中国古畫譜集成第十九卷、山東美術出版社、2000年）

「玉堂富貴」（『清末年畫』人民美術出版社、2000年）

「玉堂富貴」（『中国濰坊清末年畫』、山東畫報出版社、2004年）  
「玉堂富貴」（鮮斎永濯繪『萬物雛形畫譜』三編、明治十二年〔1879〕刊本）

## ぎよくはんかんもうこう 玉幡竿孟康

孟康は『水滸伝』の中の一人の豪傑で、綽名は「玉幡竿」という。彼は船を造るのが得意である。後に梁山泊に入った。

## 【出典】

戴宗又問道、這位好漢高姓大名。鄧飛道、我這兄弟、姓孟名康、祖貫是真定州人氏、善造大小船隻。原因押送花石綱、要造大舡、嗔怪這提調官催併責罰他、把本官一時殺了、棄家逃走在江湖上、綠林中安身、已得年久。因他長大白淨、人都見他一身好肉體、起他一箇綽號、叫他做玉幡竿孟康。（百二十回本『水滸伝』第四十四回）

## 【作例】

「孟康」（清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔1835〕和刻本）

「玉幡竿孟康」（葛飾前北斎爲一筆『繪本水滸伝』、文政一二年〔1829〕序、萬極堂梓）

「玉幡竿孟康」（仮名垣魯文標記、一雲斎国久畫『繡像水滸銘々傳』後篇上、弘化五年〔1808〕刊本）

「玉幡竿孟康」（柳水亭種清著、葵岡北溪畫『水滸畫傳』、安政三年〔1856〕序、甘泉堂板）

## ぎよくひしょうきんだいけん 玉臂匠金大堅

金大堅は『水滸伝』の中の一人の豪傑で、綽名は「玉臂匠」という。後に梁山泊に入った。



## 【出典】

吳學究又道、吳用再有箇相識、小生亦思量在肚裏了。這人也是中原一絕、見在濟州城裏居住。本身姓金、雙名大堅、開得好石碑文、刻得好圖書玉石印記、亦會鎗棒廝打。因爲他雕得好玉石、人都稱他做玉臂匠。(百二十回本『水滸傳』第三十九回)

## 【作例】

〔金大堅〕(清・陸謙畫『天罡地煞圖』不分卷、天保六年〔835〕和刻本)

〔玉臂匠金大堅〕(葛飾前北齋爲一筆『繪本水滸傳』、文政一二年〔829〕序、萬極堂梓)

〔玉臂匠金大堅〕(仮名垣魯文標記、一雲齋国久畫『肖像水滸銘々傳』前編下、弘化五年〔1808〕不朽堂刻本)

〔玉臂匠金大堅〕(江境菴花川編、月岡芳年筆『繡像水滸銘々傳』初編、慶應三年〔867〕序、大橋堂梓・藏板)

## ぎよししろうくをかなしむ 許孜悲死鹿

許孜(生卒不詳)は、字が季義といい、東陽の吳寧(浙江省東陽市吳寧)の人である。大変謙虚で聡明である。彼はかつて預章の太守で会稽出身の孔冲到師事したことがある。沖がなくなつた後、孜が沖の亡骸を会稽に送つた。間もなく孜の両親も亡くなつた。孜は妻と別れて墓地に宿ることにした。彼は墓地の周辺に松柏を五六里植えたが、時に鹿が松柏を齧つた。孜が悲しくて「鹿はなぜ思いやりがないだらうか」と嘆いた。翌日、鹿が猛獣に殺された。その猛獣も自殺した。孜はさらに悲しくて、鹿と猛獣を木々の下に埋葬した。以後、木々が茂つて、動物に齧られることはなかった。

## 【出典】

許孜字季義、東陽吳寧人也。孝友恭讓、敏而好學。年二十、師事

豫章太守會稽孔冲、受詩、書、禮、易及孝經、論語。學竟、還鄉里。

冲在郡亡、孜聞問盡哀、負擔奔赴、送喪還會稽、蔬食執役、制服三年。俄而二親沒、柴毀骨立、杖而能起、建墓於縣之東山、躬自負土、不受鄉人之助。或愍孜羸憊、苦求來助、孜書則不逆、夜便除之。每一悲號、鳥獸翔集。孜以方營大功、乃棄其妻、鎮宿墓所、列植松柏互五六里。時有鹿犯其松栽、孜悲歎曰、鹿獨不念我乎。明日、忽見鹿爲猛獸所殺、置於所犯栽下。孜悵惋不已、乃爲作冢、埋於隧側。猛獸即於孜前自撲而死。孜益歎息、又取埋之。自後樹木滋茂、而無犯者。積二十餘年、孜乃更娶妻、立宅墓次、烝烝朝夕、奉亡如存、鷹雉棲其梁、簷鹿與猛獸擾其庭圃、交頸同遊、不相博噬。(唐・房玄齡等撰『晉書』卷八十八、列傳第五十八)

## 【作例】

〔許孜悲死鹿〕(貝原先生遺稿、浦川公左畫圖『續二十四孝繪抄』、天保一三年〔833〕、高山房・宋榮堂合梓)

## ぎよしやうたをうたう 漁者唱歌

【作例】  
〔漁者唱歌〕(法橋玉山畫『畫本玉藻譚』卷一、文化二年〔1805〕刊本)

## きよじゅんししょうぐ 許詢勝具

許詢は、字が玄度といい、山水を遊歴するのが好きである。彼は単なる遊歴する情があるだけではなく、その体力も健やかである。時の人は、許が名勝を遊歴の情だけではなく、名勝に至るまでの足腰も具えているという。

## 【出典】

舊注世説云、許詢字玄度、好遊山澤、而體便登陟。時人曰、許非徒



有勝情，有濟勝之具。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷下）

## 【作例】

「許詢勝具」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』二編卷十、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

## ぎよしょう 漁樵

↓「漁樵問答」

## 【作例】

「漁樵圖」（『集古名公畫式』卷一、中国古畫譜集成第四卷、山東美術出版社、2000年）

## ぎよしょうげつたん 許邵月旦

許邵は許劭の誤りである。許劭は後漢の汝南平輿（河南省平輿）の人である。彼は若い頃名節がある。曹操がかつて自分のことを評価してもらったことがある。劭は彼のことを蔑視するので、「君は天下太平の時に姦賊であり、乱世の時に英雄である」と言った。曹操はそれを聞き大変喜んで帰った。最初は劭と従兄の靖は人を評価することが好きで、毎月一日に評価の人物を変えするため、汝南では俗に「月旦評」という。「日」を一字に組み合わせると、「旦」という字となる。

## 【出典】

後漢 許劭字子將，汝南平輿人。少峻名節，好人倫，多所賞識。時郭泰亦知人。故天下言拔士者，稱許郭。曹操微時，常卑辭厚禮，求為己目。劭卑其人曰，君清平之奸賊，亂世之英雄。操大悅而去。初劭與從兄靖俱有高名。好共覈論鄉黨人物，每月輒更其品題。故汝南俗有月旦評焉。（唐・李瀚撰、宋・徐子光注『蒙求集注』卷上）

## 【作例】

「許邵月旦」（下河邊拾水圖解、吉備祥顕考訂『蒙求圖會』初編卷五、享和元年〔1801〕序刊本、河内屋等發行）

## ぎよしょうもんどう 漁樵問答

「漁樵問答」についての文献は二つあり、それぞれ内容が異なる。その一は、漁師が伊水の川辺で魚釣りをし、樵夫が薪を担いで一服した際の二人の会話である。その二は、漁師が鷺潭で魚を捕る際、陸上の樵夫がそこを通った時の二人の会話である。

## 【出典】

漁者垂釣於伊水之上。樵者過之弛擔而歇息肩，坐于磐石之上而問于漁者曰，魚可釣取乎。曰，然。曰，鉤非餌可乎。曰，否。曰，非鉤也，餌也。魚利食而見害，人利魚而蒙利。其利同也，其害異也。敢問何故。漁者曰，子樵者也，與吾異，治安得侵吾事乎。然亦可以為子試言之。彼之利，猶此之利也。彼之害，亦猶此之害也。子知其小，未知其大。魚之利食，吾亦利乎食也。魚之害食，吾亦害乎食也。子知魚終日得食為利，又安知魚終日不得食，不為害。如是，則食之害也重，而鉤之害也輕。子知吾終日得魚為利，又安知吾終日不得魚，不為害也。如是，則吾之害也重。魚之害也輕。以魚之一身當人之一食，則魚之害多矣。以人之一身當魚之一食，則人之害以多矣。又安知鉤乎大江大海，則無易地之患焉。魚利乎水，人利乎陸。水與陸異，其利一也。魚害乎餌，人害乎財。餌與財異，其害一也。又何必分乎彼此哉。子之言，體也，獨不知用爾。樵者又問曰，魚可生食乎。曰，烹之可也。曰，必吾薪濟子之魚乎。曰，然。曰，吾知有用乎子矣。曰，然則子知子之薪能濟吾之魚。不知子之薪所以能濟吾之魚也。薪之能濟魚久矣，不待子而後知。苟世未知火之能用薪，則子之薪雖堆積丘山，獨且奈何哉。樵者曰，願聞其方。曰，火生于動，水生于靜。動

静之相生，水火之相息。水用火也，草木體也。用生于利，體生于害。利害見乎情，體用隱乎性。一性一情，聖人成能子之薪。猶吾之魚，微火則皆為腐臭朽壞，而無所用矣。又安能養人七尺之軀哉。樵者曰，火之功大于薪，固已知之已。敢問善灼物何必待薪而後傳。漁者曰，薪，火之體也。火，薪之用也。無體待薪，然後為體。薪無用待火，然後為用。是故，凡有體之用，皆可焚之矣。曰，水有體乎。曰，然。曰，火能焚水乎。曰，火之性，能迎而不能隨。故滅水之體，能隨而不能迎。故熱是，故有溫泉而無寒火，相息之謂也。曰，火之道生于用，亦有體乎。曰，火以用為本，以體為末，故動。水以體為本，以用為末，故靜。是火亦有體，水亦有體也。故能相濟，又能相息。非獨水火則然，天下之事皆然，在乎用之何如爾。樵者曰，用可得聞乎。曰，可以意得者，物之性也。可以言傳者，物之情也。可以象求者，物之形也。可以數取者，物之體也。用也者妙，萬物為言者也。可以意得而不可以言傳。曰，不可以言傳，則子惡得而知之乎。曰，吾所以得而知之者，固不能言傳，非獨吾不能傳之以言，聖人亦不能傳之以言也。曰，聖人既不能傳之以言，則六經非言也耶。曰，時，然後言，何言之有。樵者贊曰，天地之道備于人，萬物之道備于身，衆妙之道備于神。天下之能事畢矣，又何思何慮。吾而今而後，知事心踐，形之為大，不及子之門，則幾至于殆矣。乃析薪烹魚而食之。而食之既而論湯。樵者問漁者曰，子以何道而得魚。曰，吾以六物具得而漁。曰，六物具也，豈由天乎。曰，具六物而得魚者，人也。具六物而所以得魚者，非人也。樵者未達，請問其方。漁者曰，六物者，竿也、綸也、浮也、沉也、鉤也、餌也。一不具，則魚不可得。然而六物具而不得魚者，非人也。六物具而不得魚者有焉。未有六物不具而得魚者也。是知具六物者，人也。得魚與不得與者，天也。六物不具而不得魚者，非天也，人也。（『古今圖書集成』博物彙編藝術典卷十四漁部藝文一之七）

有漁於鷺潭之上者。始焉，銳志圖大。十一任公子之為，萬一得其所得連九罟之網，求吞舟之魚于百尺之淵，終歲而弗獲一。既而波臣振威，風伯騰笑，怒濤狂飆，起於中流。絕其網而後返，乃退而補網。求得魚於蘆花淺水間，巨鱗不入也。小白寸鮒不足一七之羹，悵然倚櫂江干。適與東樵之老樵相遇於大通煙雨間，揖而問焉，吾將舍吾漁而從若樵，樵亦有道乎。老樵啞然笑曰，何適而非道，必去彼取此也，所適則非道矣。漁者曰，道可言乎。曰，惡，惡可言者，道之障也。至道之極淵，淵默。默，至道之精渺。渺冥。冥，至道之窳元。元妙。妙，凡有言者。皆障道之具。捨精華而取糟粕，是猶漁於江潭，不知有溟渤之大。樵於藪澤，不知有鄧林之奇。欲得化鵬之鯤，蔽牛之蔭。終其身而不一遇者，所見小也。（清・張潮等撰『昭代叢書』丁集新編三十七卷，楊復古輯，釋成鷺「漁樵問答」）

#### 【作例】

「漁樵問答」（葉九如編『三希堂畫譜』人物畫譜大觀、中国古畫譜集成第十八卷、山東美術出版社、2000年）

「漁樵閑話」（明・止雲居士選『万壑清音』、天啓四年〔1624〕刊本）

「漁樵閑話」（明刊本『新刻出像官板大字西遊記』卷二、萬曆二〇年〔1602〕刊本）

「無題」「漁樵問答」（林守篤編述『畫筌』卷四、正徳二年〔1712〕序、享保六年〔1721〕刊本）

#### きよせいがん 許栖岩

許栖岩は岐陽の人である。科擧の試験を受けるために、昊天観という寺院に住み、毎朝必ず本尊の前に祈った。南康の韋臯太尉が蜀を支配した際、皆が彼を慕って行った。許栖岩も蜀に行きたく、市場に馬を買いに行った。ある外国の商人が一匹の馬を売っている。馬が痩せ、値段が安いので、許栖岩はその馬を買った。しかし、その馬に乗って

うまく蜀に行けるか。許栖岩が不安に思い、道士に占ってもらった。道士は「この馬は龍の種である。大事にして下さい」と言った。すると、許栖岩はその馬に乗って旅に出た。しかし、途中、許栖岩と馬と一緒に万丈の山谷に墜落した。意外にも下には厚い落ち葉の層があるため、人も馬も怪我しなかった。許栖岩はしばらく溜息をして落胆した。続けて前に進み、一つの洞窟の前まで辿り着いた。許栖岩が中に入り、十数里のところ突然野原が広がり、花が咲き乱れ、池水が透きとおる。一人の道士が石の上に横になっており、二人の侍女が仕えている。その道士は太乙眞君である。許栖岩は二人の侍女に挨拶し、自分の遭遇を告げた。侍女は不憫に思い、眞君に報告した。そこで、眞君は許栖岩と道教の話をしながら石髓でもてなした。二人が話の最中、前に馬を占ってもらった道士も入ってきた。三人は一緒に東海西龍山に仙人たちの集まりに出かけた。半月後、許栖岩は再び馬に乗って帰途についた。洞窟を出た際、二人の侍女は「魏県の田老婆の針が少しほしい」と許栖岩に頼んだ。すると、許栖岩は馬に乗ってあつという間に魏県に行き、田老婆を見つけ、買った針を馬に隠し、馬を放した。すると、馬が龍に化けて行ってしまった。大中（847～860）の末頃、許栖岩が再び太白山に入ったという。

## 【出典】

許棲巖，岐陽人也。舉進士，習業於昊天觀。每晨夕，必瞻仰眞像，朝祝靈仙，以希長生之福。時南康韋臯太尉鎮蜀，延接賓客，遠近慕義，遊蜀者甚多。巖將爲入蜀之計，欲市一馬而力不甚豐，自入西市訪之。有蕃人牽一馬，瘦削而價不高。因市之而歸。以其將遠涉道途，日加芻秣，而肌膚益削。疑其不達前所，試詣卜肆筮之，得乾卦九五。道流曰，此龍馬也，宜善寶之。泊登蜀道危棧，棲巖與馬俱墜崖下。積葉承之，幸無所損。仰不見頂，四面路絕。計無所出，乃解鞍去衛，任馬所往。於槁葉中得粟如拳，棲巖食之，亦不饑矣。尋其

崖下，見一洞穴，行而乘之。或下或高，約十餘里。忽爾及平川，花木秀異，池沼澄澈。有一道士臥於石上，二女侍之。巖進而求見。問二玉女，云是太乙眞君。巖即以行止告玉女。玉女憫之，白於眞君。曰，爾於人世，亦好道乎。曰，讀莊老黃庭而已。曰，三景之中，得何句也。答曰，老子云，其精甚眞。莊子云，息之以踵。黃庭云，但思以卻壽無窮。笑曰，去道近矣，可教也。命坐，酌小盃以飲之曰，此石髓也。嵇康不能得近，爾得之矣。乃邀入別室。有道士，云是潯陽尊師，爲眞君布算。言今夕當東遊十萬里。巖熟視之，乃卜馬道士也。是夕，巖與潯陽從太乙君登東海西龍山石橋之上，以赴羣眞之會。座內仙客有東黃君，見棲巖喜曰，許長史孫也。有仙相矣。及明，復從太乙君歸太白山中。居半月，思家求還。太乙曰，汝飲石髓，已壽千歲。無輪泄，無荒淫。復此來再相見也。以所乘馬送之。將行，謂曰，此馬吾洞中龍也，以作怒傷稼，謫其負荷。子有仙骨，故得值之。不然，此太白山天，瑤華上官，何由而至也。到人間，放之漚曲，任其所適，勿復留之。既別，逡巡已達魏縣。則無復故居矣。問鄉人，年代已六十年。出洞時，二玉女託買魏縣田婆針，乃市之。杖繫馬鞍上，解鞍放之，化龍而去。棲巖幼在鄉里，已見田婆。至此，惟田婆容狀如舊，蓋亦仙人也。棲巖大中末年，復入太白山去。出傳奇。（宋・李昉等撰『太平廣記』卷四十七）

## 【作例】

「許栖岩」（明・王世貞『有象列仙全傳』卷六、萬曆二八年〔1600〕刊本）

## ぎよせんのみず 漁船圖

## 【作例】

「漁船圖」（普齋岡子雉著述「大岡普齋」、橘辨次守国「橘辨次」圖畫「畫典通考」卷四、享保十二年〔1727〕刊本）

## きよせんへい 許宣平

許宣平は新安歙（安徽省歙県）の人である。唐の睿宗（710～712在位）の景雲（710～711）頃、城陽山南塢に隠居した。丹葉を服用するかどうかはよくわからない。食事をとっていないのは事実である。顔は四十歳ぐらいの人のようで、歩くと走る馬のような速さである。時には薪を背負って市場に売る。薪を担ぐ平行棒に常に瓢箪と竹の杖がかかっている。いつも酔っぱらうと、飛んでいるように帰る。天寶（742～756）の頃、李白が翰林から出て傳舎を通った際、許宣平の詩を見て、「これは仙人の詩だ。」と嘆き、新安まで許宣平を探したという。懿宗帝の咸通十二年（871）、郡の許明奴の下女が友達と一緒に薪を採る。ある日、南山で一人が石に座って桃を食べている。その人は下女に「私は明奴の先祖許宣平だ。」といい、桃を一個与えた。下女が食べると、体が軽くなり、薪を担いでもまったく重量を感じない。帰宅して許宣平のことを告げると、明奴に怒られ、杖で下女を殴ったが、彼女の体が杖と一緒に動く。後に行方不明になり、たまに誰かが山の中で彼女の姿を見かけることができる。木の皮の服を着て飛ぶように走っていた。

## 【出典】

許宣平、新安歙人也。睿宗景雲中、隱於城陽山南塢、結菴以居，不知其服餌，但見不食，顏若四十許人，行疾奔馬。時或負薪以賣，常掛一花瓢及曲竹杖，每醉騰騰以歸，獨吟曰，負薪朝出賣，沽酒日西歸。路人莫問歸何處，穿白雲行入翠微。爾來三十餘年，或濟人艱危，或救人疾苦。城市之人多訪之不見，但覩菴壁題詩云，隱居三十載，築室南山巔。靜月翫明月，閒朝飲碧泉。樵人歌隴上，谷鳥戲巖前。樂矣不知老，都忘甲子年。好事多詠其詩，抵長安者，於驛路洛陽同華間傳舍，是處題之。天寶中，李白自翰林出，東遊經傳舍，覽

詩吟之，嗟歎此仙人詩也。乃詰之於人，得宣平之實。白於是遊及新安，涉溪登山，累訪之不得，乃題其菴壁曰，我吟傳舍詩，來訪真人居。煙嶺迷高跡，雲崖隔太虛。窺庭但蕭索，倚杖空躊躇。應化遼天鶴，歸當千載餘。是冬，野火燎其菴，莫知宣平蹤跡。百餘年後，咸通七年，郡人許明奴家媪，常逐伴入山採樵，獨於南山中，見一人獨坐石上，方食桃，甚大。問媪曰，汝許明奴家人也。我明奴之祖宣平也。媪言，常聞已得仙多年。曰，歸爲我語明奴。言我在此山中，與汝一桃食之，不可將出。山中虎狼甚多，山神惜此桃。媪乃食桃，甚美，頃之而盡。宣平遣媪隨樵人歸家言之。明奴之族甚異，傳聞於郡人。其後，媪憎食，日漸童顏，輕健愈常。中和年以來，兵荒相繼，居人不安，明奴徙家避難，媪入山不歸。今人採樵，或有見其媪，身衣藤，行疾如飛。逐之，昇林而去。（唐・沈汾撰『續仙傳』卷中）

## 【作例】

「許宣平」〔明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷六、萬曆二八年〔1600〕刊本〕  
 「許宣平」〔明・胡應明撰『仙佛奇踪』卷二、萬曆三〇年〔1602〕刊本〕  
 「許宣平」〔明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十一卷、萬曆三七年〔1609〕刊本〕

## きよそん 許遜

許遜、字は敬之といい、号は真君という。南昌（江西省南昌）の人である。母親は夢で金の鳳が珠を銜え、掌に落とした。鑑賞して吞んだ。目が覚めると、腹痛を感じ、そして妊娠して真君を産んだ。真君は生まれつき聡明で、容姿は男らしい。幼い頃、気がきく。人とは喧嘩しない。かつて人と狩獵に行つて鹿を撃ち殺した。母親の鹿が悲しそうに小鹿を舐めているのを見て、悟った。弓と矢を折って捨てた。



一所懸命に勉強し、経、史、天文、地理、音楽、易などの書物をすべて読んだ。なかでも神仙の修行を好む。呉猛に師事して丁義神方の秘術を覚えた。また郭璞に願って修行の場所をもらい、毎日修行に励んでいた。

## 【出典】

西晋末、有旌陽縣令許遜者、得道於豫章西山。江中有蛟爲患、旌陽沒水、劍斬之。後不知所在。頃漁人網得一石甚鳴、擊之、聲聞數十里。唐朝趙王爲洪洲刺史、破之得劍一雙。視其銘一有旌旌陽字、一有萬仞字。遂有萬仞師出焉。（唐・張鷟撰『朝野僉載』卷三）

許遜。南昌人。太康元年爲蜀旌陽令。師事女眞諶母、永嘉末、海昏大蛇斷道、遂仗劍斬之。寧康二年、四十二口與雞犬皆上升。封爲眞君。（宋・祝穆撰『方輿勝覽』卷十九）

許遜、字敬之、號眞君、南昌人。吳赤烏二年、母夢金鳳啣珠。墜於掌上。玩而吞之。及寤、覺腹痛、因是有娠而生眞君。生而穎悟、姿容俊偉、少小疎通、與物無忤。嘗從獵、射一鹿、中之而斃、鹿母皇顧孫之、因感悟、折棄弓矢、尅意爲學。博通經史、明天文、地理、音律、五行、讖緯之書。尤嗜神仙修煉之術。聞西安吳猛得丁義神方、乃往師之、悉受其秘。又從郭璞求善地爲栖眞之所、得西山之陽逍遙山金氏宅而居之、日以修煉爲事。時買一鐵燈檠。因夜燃燈。見漆剝處有光。視之金也。明日訪售主還之。〔略〕過西安縣、縣社伯出謁。眞君問其地有妖物爲民害者不。其神匿之。眞君行過一小廟、廟神迎告曰、此有蛟害民、知仙君來、逃往鄂渚矣。眞君追至鄂渚、路逢三老人。指曰、蛟伏前橋下。眞君至橋、仗劍叱之。蛟驚、奔入大江。匿於深淵。乃勅吏兵驅之。蛟從上流奔出、遂誅之。又聞新吳有蛟、眞君乃以巨石書符、作鎮蛟文以禁之。時海昏之上隸有巨蛇、據山爲穴、吐氣成雲、亘四十里。人畜在其氣中者、俱被吞吸。無得免者。江湖舟舩、多遭覆溺。大爲民害。眞君聞之、乃集弟子往

誅之。〔略〕眞君命弟子陳勳時荷持冊前導、周廣、曾亨、駱御、黃仁覽與其家族侍從、盱烈與其母部侍從。仙卷四十二口、同時白日拔宅昇天。雞犬亦隨。（明・王世貞撰『有象列仙全傳』卷四）

## 【作例】

〔許遜〕（明・王世貞『有象列仙全傳』卷四、萬曆二八年〔1600〕刊本）

〔許遜〕（明・洪應明撰『仙佛奇踪』卷二、萬曆三〇年〔1602〕刊本）

〔許遜〕（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物十一卷、萬曆三七年〔1609〕刊本）

## ぎよそんせきしょう 漁村夕照

〔漁村夕照〕は瀟湘八景の一つである。

↓〔瀟湘八景〕

## きよちよ 許褚

許褚、字は仲康といい、譙國の譙（安徽省亳州）の人である。身長が八尺余り、腰回りも太い。容貌が男らしく、力が大きい。漢の末、若者と宗族数千戸を集め、共に城を固く固め、盜賊を抵抗する。時に汝南葛陂の盜賊一万人余りが褚の城を攻めた。褚の兵力が少ないため、ぎりぎりまで闘っていた。矢が無くなったら、褚は城の中の男女に石を大量に四つの隅に置くように命じ、石を飛ばして敵を撃つ。その破壊力は甚だしく大きい。それで盜賊の攻撃を阻止した。城内の食糧が乏しいため、盜賊に降伏するふりをして牛で盜賊の食糧と交換する。盜賊が食糧を届けて、牛を受取るうとしたが、牛は走って戻った。褚が前に出て、牛のしっぽを取って、百歩あまりを歩んだ。盜賊が驚いて、牛を受け取らずに戻った。そのため、淮、汝、陳、梁の間に皆が褚を恐れる。魏の太祖曹操が淮、汝を巡回した際、褚が皆を率いて



太祖に帰順した。太祖が褚を見て賞賛した。「これは私の樊噲だ。」と。その日に都尉に任命し、自分の警護に当てさせる。連れて行った兵士は皆虎士として警護隊に入った。後に曹操が馬超に会見した際、馬超は曹操を襲いたいのが、許褚のことが気になり、曹操に「虎侯はどこにいるか。」と聞いた。曹操は振り返って許褚を指した。すると、許褚は目を丸くして馬超を睨んだ。馬超はついにあきらめた。その後、「虎侯」は許褚の愛称となった。許褚が亡くなり、諡は「壮侯」という。

## 【出典】

許褚、字仲康、譙國譙人也。長八尺餘、腰大十圍、容貌雄毅、勇力絶人。漢末、聚少年及宗族數千家、共堅壁以禦寇。時汝南葛陂賊萬餘人攻褚壁、褚衆少不敵、力戰疲極。兵矢盡、乃令壁中男女聚治石如杆斗者置四隅、褚飛石擲之、所值皆摧碎、賊不敢進。糧乏、僞與賊和、以牛與賊易食。賊來取牛、牛則奔還。褚乃出陣前、一手逆曳牛尾行百餘步。賊驚恐、遂不敢取牛而走。由是淮、汝、陳、梁間、皆畏憚之。太祖徇淮、汝、褚以衆歸太祖、太祖見而壯之曰、此吾樊噲也。即日拜都尉、引入宿衛。從褚俠客、皆以爲虎士。從征張繡、先登、斬首萬計、遷校尉。從討袁紹於官渡。時常從士徐他等謀爲逆、以褚常侍左右、憚之不敢發。伺褚休下日、他等懷刀入。褚至下舍心動、即還侍。他等不知、入帳見褚、大驚愕。他色變、褚覺之、即擊殺他等。太祖益親信之、出入同行、不離左右。從圍鄴、力戰有功、賜爵關內侯。從討韓遂、馬超於潼關。太祖將北渡、臨濟河、先渡兵、獨與褚及虎士百餘人留南岸斷後。超將步騎萬餘人、來奔太祖軍、矢下如雨。褚白太祖、賊來多、今兵渡已盡、宜去、乃扶太祖上船。賊戰急、軍爭濟、船重欲沒。褚斬攀船者、左手舉馬鞍蔽太祖。船工爲流失所中死、褚右手並泝船、僅乃得渡。是日、微褚幾危。其後太祖與遂、超等單馬會語、左右皆不得從、唯將褚。超負其力、陰欲前突太祖、素聞褚勇、疑從騎是褚。乃問太祖曰、公有虎侯者安在。

太祖顧指褚、褚瞋目盼之。超不敢動、乃各罷。後數日會戰、大破超等、褚身斬首級、遷武衛中郎將。武衛之號、自此始也。軍中以褚力如虎而癡、故號曰虎癡。是以超問虎侯、至今天下稱焉、皆謂其姓名也。(晉・陳壽撰『三國志』卷十八、魏書・二李臧文呂許典二龐閻傳第十八)

## 【作例】

「許褚」(百二十回本『繪圖三國演義』、光緒一六年[1890]上海圖書集成局刊本)

「許褚」「笠翁筆」(法眼春卜一翁集『畫史會要』卷二、寛延四年初秋[1751]刊本)

## きよはくぎよく 蘧伯玉

蘧伯玉は衛国の賢人である。しかし衛の主君靈公は蘧伯玉を任用せず、夫人彌子瑕を寵愛してすべて任せる。ある晩、靈公が彌子瑕とくつろいでいるところ、ふっと馬車のりんりんの音が聞こえた。宮の前に着くと音が消えた。過ぎると、またりんりんの音が聞こえた。靈公は「この人はだれか。」と聞いた。夫人は「この人は蘧伯玉だ。」と。靈公は「なぜわかるか。」と。夫人は「宮の門の前に下車する。馬車の音を立てない。それを以て主君への畏敬を広く知らせるためである。忠臣と孝子は、たとえ真つ暗の中でもその礼をちゃんとする。蘧伯玉は衛の賢大夫なので、この人は仁義だけではなく、知恵もあり、真つ暗の中でも誰も知らないからといって、礼儀を省くことはない。故に蘧伯玉だとわかる。」と。靈公は人を遣って確認したら、果たして蘧伯玉であった。

衛の大夫史鰌は何回も靈公に蘧伯玉を起用するよう諫めた。しかし一向聞き入れてもらえない。史鰌は病気で危篤になり、息子にこう言った、「私が死んだら、北堂で葬式をやってください。私は生きて

いるうち、蘧伯玉を推薦できず、彌子瑕を辞めさせられず、主君を正すことができなかつた。生きて君子を正せなかつたので、死後も礼儀のことができない。屍を北堂に置いてくれれば、十分だ。」と。史鯨が死んだ後、霊公が焼香に行った。棺が北堂に置いているのを見て、そのわけを聞いた。史鯨の息子が父親の遺言を話した。そのため、霊公はすっかり顔色が変わり、「あなたは生きて一所懸命賢人を薦め、彌子瑕を辞めさせるよう諫めたが、死んだ後も一所懸命に屍を以て諫めようとする。まさに忠義を貫いたのだ。」といい、さっそく蘧伯玉を招き、彌子瑕を辞めさせた。史鯨の棺を正堂に移してちゃんと葬式を行ってから、国政に戻った。

## 【出典】

衛霊公之時、蘧伯玉賢而不用、彌子瑕不肖而任事。衛大夫史鯨患之、數以諫靈公而不聽。史鯨病且死、謂其子曰、我即死、治喪於北堂。吾不能進蘧伯玉而退彌子瑕、是不能正君也。生不能正君者、死不當成禮。置尸北堂、於我足矣。史鯨死、靈公往弔、見喪在北堂、問其故。其子具以父言對靈公。靈公蹴然易容、寤然失位、曰、夫子生則欲進賢而退不肖、死且不懈、又以屍諫、可謂忠而不衰矣。於是乃召蘧伯玉而進之以爲卿。退彌子瑕。徒喪正堂。成禮而後返衛國以治。史鯨字子魚、論語所謂直哉史魚者也。（漢・劉向撰『新序』卷一、雜事第一）

霊公與夫人夜坐、聞車聲轆轤、至闕而止、過闕復有聲。公問夫人曰、知此謂誰。夫人曰、此蘧伯玉也。公曰、何以知之。夫人曰、妾聞禮下公門、式路馬、所以廣敬也。夫忠臣與孝子、不爲昭昭變節、不爲冥冥情行。蘧伯玉、衛之賢大夫也、仁而有智、敬於事上、此其人必不以闇昧廢禮、是以知之。公使視之、果伯玉也。（漢・劉向撰『古列女傳』卷三）

## 【作例】

「蘧伯玉」（明・汪廷訥編『勸懲故事』卷五、寛文九年〔1669〕和刻本）

「暮夜循禮」（明・汪廷訥編『勸懲故事』卷五、寛文九年〔1669〕和刻本）

「蘧伯玉」（『孔門儒教列傳』卷三、明刊本）

「蘧伯玉」（橘有税『繪本故事談』卷一、正徳四年〔1714〕刊本）  
↓「蘧瑗」

## ぎよふ 漁父

## 【作例】

「漁父」（『任渭長畫傳四種』高士傳、中国古畫譜集成第四集、山東美術出版社、2009年）

「漁父」（文鳳駿聲『文鳳漢畫』、享和三年〔1803〕刊本）

「漁父」（法眼周山編『和漢名筆畫英』卷一、寛延三年〔1750〕刊本）

## ぎよふこうひん 漁夫江濱

これは漁父と屈原との間の会話を図解する絵である。

## 【出典】

漁父問曰、子非三閭大夫歟。何故至此。原曰、舉世混濁而我獨清、衆人皆醉、而我獨醒。是以見放。漁父曰、夫聖人不凝滯於物、而能與世推移。舉世混濁、何不隨其流而揚其波。衆人皆醉、何不鋪其糟而啜其醪。何故懷瑾握瑜、而自令見放爲。原曰、吾聞之、新沐者必彈冠、新浴者必振衣。誰以身之察察、受物之汶汶者乎。寧赴湘流而葬乎江魚腹中耳。又安能以皓皓之白、而蒙世之塵埃乎。乃作懷沙之賦、懷石自投汨羅以死。後百餘年、賈生爲長沙太傅、過湘水、投書以弔之。（唐・李瀚撰、宋・徐子『蒙求集注』）

【作例】

「漁夫江濱」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』二編卷七、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

ぎよふのあそび 漁父遊

【作例】

「漁父遊び」(法眼橋保国『繪本詠物選』卷四、安永八年 [1779] 刊本)

ぎよゆ 許由

↓「許由巢父」

【作例】

「許由」(晋・皇甫謐撰、清・任熊繪『高士傳』、咸豐八年 [1858] 刊本)

「許由」[狩野玉楽筆] (法眼春卜一翁『和漢名畫苑』四卷、寛延二年 [1749] 序刊本)

ぎよゆいつひよう 許由一瓢

許由は賢人である。彼が箕山に隠居した際、器がないので、手で水を掬い飲んだ。そのため、人が彼に一つの瓢を贈った。水を飲み終わった後、許由が瓢を木に掛けた。だが、瓢が風に吹かれて音がするため、許由がうんざりして瓢を川に捨てた。

【出典】

逸士傳。許由隱箕山，無盃器，以手捧水飲之。人遺一瓢，得以操飲，飲訖掛于木上。風吹漚漚有聲，由以為煩，遂去之。(唐・李瀚撰，宋・徐子光注『蒙求集注』卷上)

【作例】

「許由一瓢」(下河邊拾水圖解、吉備祥頭考訂『蒙求圖會』初編卷九、享和元年 [1801] 序刊本、河内屋等發行)

ぎよゆそうつふ 許由巢父

堯は天下を許由に譲ろうとした。許由はそれを聞いて逃げた。許由が川辺で耳を洗っているところ、巢父はそれを聞いて、早速牛を連れて帰った。その水を牛に飲ませたくないという。また、樊監、字は仲文という人が許由(一説は巢父。樊仲父の条項をご参照)の話聞いて牛を連れて帰ったという説もある。

許由の墓は箕山にあり、墓のそばに泉が流れている。その山の麓に巢父が牛に水を飲ませた牽牛墟というところがあり、牛の足跡がまだ残っている。近くに許由の廟があるという。

【出典】

堯以天下讓許由，許由不受，又讓於子州支父。(《莊子》卷八，讓王篇)

齊將軍田贖出將，張生郊送曰，昔者堯讓許由以天下，洗耳而不受，將軍知之乎。曰，唯，然，知之。(漢・劉向撰『說苑』卷八)

恥巢父洗耳。逸士傳曰，堯讓天下于許由。由逃之。巢父聞而洗耳于池濱。樊監字仲文。方飲牛。乃驅而還。恥令牛飲其洗耳之下流。(宋・吳淑撰『事類賦』卷七地部)

箕山在登封東，許由洗耳於此。(宋・潘自牧撰『記纂淵海』卷十九) 縣南對箕山，山上有許由冢，堯所封也。故太史公曰，余登箕山，其上有許由墓焉。山下有牽牛墟，側潁水有犢泉，是巢父還牛處也，石上犢跡存焉。又有許由廟，碑闕尚存，是漢潁川太守朱寵所立。(後魏・酈道元撰『水經注』卷二十二)

## 【作例】

「無題」〔許由〕（西川祐信『繪本池乃心』）

「許由巢父」〔許由洗耳、巢父牽牛婦〕（某岡之繪『繪圖の林』卷上、元禄二年〔1689〕刊本）

## きよれい巨靈

伝えることによると、漢の武帝の頃、東郡から五寸大の小人が献上された。名前は「巨靈」といい、また「巨靈人」とも呼ばれる。巨靈は女の子である。武帝の寵愛を受けた。机の上を歩いたり、玉の壺の中に入ったりして、武帝を喜ばせた。ある日、東方朔が入ってきて、巨靈をじつと見つめ、「西王母は元氣か」と聞いた。というのは東方朔は巨靈が西王母の侍女だと分かっているからである。巨靈がそれを聞き、青雀に化けて飛んで行ったという。

## 【出典】

東郡送一短人、長五寸、衣冠具足。上疑其精，召東方朔至。朔呼短人曰、巨靈、阿母還來否。短人不對，因指謂上，王母種桃三千年一結子，此兒不良，已三過偷之。失王母意，故被謫來此。上大驚，始知朔非世中人也。短人謂上曰、王母使人來告陛下求道之法，惟有清靜，不宜躁擾。言終弗見。（漢・班固撰『漢武故事』不分卷）

唯一女人愛悅於帝。名曰巨靈。帝傍有青珉唾壺。巨靈乍出入其中。或戲笑帝前。東方朔望見巨靈乃目之。巨靈因而飛去。望見化成青雀。因其飛去。帝乃起青雀臺。時見青雀來。則不見巨靈也。（漢・郭憲撰『洞冥記』卷四）

## 【作例】

↓「巨靈人」

## きよれいじん 巨靈人

↓「巨靈」

## 【作例】

「巨靈人」（橘宗重著、長谷川等雲繪『繪本寶鑑』卷三、貞享四年〔1687〕刊本、文政一年〔1818〕再刊本）

## きよれいじんとらを口するず 巨靈人口虎圖

## 【作例】

「巨靈人口虎圖」（橘有税「橘氏宗兵衛」『繪本寫寶袋』卷七、享保五年〔1720〕刊本）

## きよろさい 許魯齋

許魯齋は許謙のことである。許謙（1199～1266）は、字が益之といい、金華（浙江省金華）の人である。著述に『叢説』など多数ある。自ら「白雲山人」と号す。世に「白雲先生」と呼ばれる。元の至元三年亡くなり、六十六歳であった。朝廷から「文懿」という諡が贈られた。ただし、「魯齋」という出所が不詳である。

## 【出典】

許謙、字益之、金華人。肆力於學，受業金履祥之門，讀四書集注，有叢説二十卷。讀詩集傳，有名物抄八卷。讀書集傳，有叢説六卷。他若天文地理、典章制度、食貨刑法、字學音韻、醫經術數之説，靡不該貫世，稱為白雲先生。（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物八卷）

許謙字益之，其先京兆人。（中略）由平江徙婺之金華，至謙五世，為金華人。（中略）謙生數歲而孤，甫能言，世母陶氏口授孝經、論語，入耳輒不忘。稍長，肆力於學，立程以自課，取四部書分晝夜讀之，



雖疾恙不廢。既乃受業金履祥之門，履祥語之曰，士之為學，若五味以之和，醯醬既加，則酸鹹頓異。子來見我已三日，而猶夫人也，豈吾之學無以感發子耶。謙聞之，惕然。居數年，盡得其所傳之奧。（中略）至元三年卒，年六十八。嘗以白雲山人自號，世稱為白雲先生。朝廷賜諡文懿。（明・宋濂等撰『元史』卷一八九、中華書局、一九七六年）

【作例】

「許魯齋」（明・王圻、王思義撰『三才圖會』人物八卷、萬曆三十七年

〔1609〕刊本）

「許魯齋」（橘有税圖畫『唐土訓蒙圖彙』卷四、享保四年〔1719〕刊本）